

| | |
|------------------|---|
| Title | 比丘尼石の話 |
| Sub Title | |
| Author | 柳田, 國男(Yanagita, Kunio) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1923 |
| Jtitle | 史学 Vol.2, No.3 (1923. 5) ,p.55(361)- 79(385) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230500-0055 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

比丘尼石の話

次 第

村に年久しき池又は泉が有る場合に、我々の祖先は實に意外なる名前と傳説とを、之に附與して居つた。國々の祖母井(うばがわ)姥ヶ池姨ヶ淵などは其一例である。單に或老女が、曾て水の邊に住んだと云ふだけなら、まだ後世の推測だとも見られるが、多くの同名の池等に於ては、姥、童兒と老幼の二人が、入つて死んだなどゝ説くのである。念佛水若くは「うはなりの湯」と稱して、人が一定の語を唱へると、忽ち水が湧き上るなどゝ謂ふのは第二の一例である。此にも駿州江尻在の姥ヶ池のやうに、大小二つの靈魂の水に宿つて居ることを傳ふるものがある。而も此等の全國に分布した話が、常に必ず或一部分の相異と、又或一部分の共通とを具へて居るのは、果して何事を意味するものであるか。

自分だけは斯う云ふ風に考へる。元來は其泉に關聯して、至つて單調なる記憶だけが遺つて居た。

愚直なる人の口吻を以て言て見れば、「何でも昔子供をつれたウバが、茲に祭られ居たと云ふ話だ、」是

くらゐの所であつたらうと思ふ。其のみでは何分話に成らず、而も昔の人は話を好んだ爲に、特に誰の力と云ふことも無く、追々に尤もらしく語り傳へたものかと思ふ。だから氣をつけて見ると、傳説にはそれぐ時代の香がある。主人の愛兒を殺して申譯が無いとて、乳母が飛込んだのを感歎したのも、城が落ちて落人の母子が殺されたのも、乃至は木母寺の梅若のやうに、上崩が物狂ひになつて児を慕つて來たと云ふのも、各社會の趣味を以て彩つた染模様に外ならず、只之を一貫した一種の情愛、形を變へて小兒の無病成育を禱る信仰と現れたものが、滔々たる人世の忘却を免れ得た、古い何物かの破片とも見られる。書いた物の勢力が今日より小さかつた時代には、民間の話は縁起や紀行を離れて又變化する。暫くして再び來て見れば、面白い位に外形が改まつて居る。其一つの最も著しい實例が、江戸の眞中の淺茅原にも有つた。

石の枕

淺草寺では安永六年の三月二十日から六月一日迄、境内神佛の總開帳があつた(イ)。一千年前の石の枕も、此時再び大に世にもて囃されたらしい。觀世音の今の縁起に、靈寶磐居の石枕と稱する物と、果して同じであるか否かは確めにくいが、其開帳に於ては、之を姥石と名けて見せたやうである。萬一にも眞物であつたとするならば、湛念な採集者も有つたものである。一つ家(や)八鬼婆が世を去つて後、久しつからずして荒屋敷となつたゞらうから、其遺跡に來て、是があの枕だと謂ふには、所謂鑑定が必要である。今も昔も鑑定家は大膽なもので、現に其靈質を見たと云ふ當世の人の中にも、なあ

に古墳から出る石器だよと、謂つた人もあるさうだが、是とても感心したい人しか感心せぬ説である。枕の格好に近い石もそこらに隨分有るだらう。我々は寧ろ或一つの石に名があつて、其が姥石であつたことに注意したい。淺草では沙渴羅龍王(さかつらりうわう)の化けた姥、磐居と磐融との二つの石を以て、旅人の頭をひしぎ殺すと謂つて居る。さうして一方の石しか残つて居らぬのである。全體寝て居る旅人を殺すには、石の枕が既に大仕掛けな話である。其上にどうして今一箇の石まで、用意した如く考へ始めたものか。此方がよつほご不思議である。而も尾州石枕の里の俗傳にも、枕の下に石を置き、槌を取り首を碎くとある(ロ)。北會津(きたあひづ)の荒井村の姥子屋敷(うばこやしき)にも同じ類の話があつて、此には老女ばかりが二人住み、かうして旅の者の命を縮めた。

荒井小松に宿とりあるな、石の枕に槌一つ

と云ふ唄も永く傳へられたが、其槌も石の槌で、小松の部落に在つて早く紛失し、石枕ばかりが荒井には遺つて居た(ハ)。どう云ふ形か大きいか小さいか、其が分らぬから話がしにくいが、枕と謂ふ以上は中凹みの稍平たい石ではあつたらう。石を枕にする風習は日本にも確かに有つた(ニ)。又人を葬るのに石の枕をさせたことも、久しい間であつたらしい。唯淺草寺又は會津の姥子屋敷に在る石を、其だと斷定するには、ちと證據が足らぬ。既に鬼婆の殺人事件を有つた事とすれば、多數の石が枕らしくも見えるであらうし、無い事とすれば愈以て轉がつて居る理由が分らず、更に又死人の枕になる石が在つただけでは、こんな怖しい話は發生しさうも無いからである。此は何でも姥石と謂ふから例の枕だらうと、早合點をした人が有つた結果に相異ない。其心持で今度は姥石と名けた石の話を、すこし

ばかり搜して見やうと思ふ。

關のをば石

姥石には固より色々の形がある。甲州八田の「しほぶき婆の石」などは、何でも無い二貫目程の三角石だと謂ふが、他の多くの場合は珍しい姿を以て先づ人を驚かしたらしく、中には明白に人工を加へた石もある。日光街道の榆木(にれぎ)の宿の西、根山(もみやま)一名大師ヶ窪の岡の上に在る姥石は、高さ五六尺あつて四面から四體づゝ、合計十六體の地藏様が彫つてある。弘法大師大蛇調伏の處と傳へ(ホ)、即ち大師と姥との因縁話の例である。此外に尙どうした石がまだわけの分らぬ姥石には、上總君津郡の關村字姥石に在るもの有名である。高さは此も約五尺だが、周圍が二丈八尺で形は八角、上面に穴があいて居る。或は關の御場石(おばいし)と書くべしと言ひ、昔此村の關所の在つた時の柱の礎だと稱するが(ヘ)。こんな巨大なものが入用だつたとも思はれぬ上に、現に祭神石凝姥命(いしこりどめのみこと)などゝ謂ふ姥神様の祠(ほこら)が有るから、オバ石の説明は不必要である。但し以前は二つあつて其一を取退けて崇られ、代りの石を南方の山の上に置いたと言つて居る。最近の百年間に重量が十倍したとは、少しく觀察が精密過ぎたが、兎に角に崇拜せられた石には相異ない。此類の石は寺や社に伴つて諸國に在る。何某將軍の旗立石などゝ言傳へて、其に相應する口碑があるが、實はまだ明白には目的が分らぬ。と言ふのは石に穴を突ち、乃至は穴ある穿を大切にした理由が、必ずしも一通りだけで無いらしいからである(ト)。上總の關の姥石には喉の病を祈つたかどうか知らぬ

が横濱に近い上星川の釜壇山などでは、山上の石塚の上に之に似寄つた石が有つて、風邪や咳で惱む者、其石の苔を採つて飲めば必ず癒え、御禮には竹の筒に酒を入れて供へること、亦淺草姥ヶ淵の信仰に近かつた(チ)。而も此には姥が何した話も遺つて居らぬが、曾て富士の狩の時に、茶を立てた釜壇の石だなど、謂つて、或は次の姥ヶ釜の例を考へ合せると、老女火祭りの跡かとも思はれる。姥ヶ釜は播州赤穂郡、有年(うね)から大津へ越える横山の嶺にあつた。六道三遍照院と云ふ寺があつたと云ふ。石を疊んで竈のやうなものを作り、其旁の三四尺の石に、女性が火箸を手に持つた像の彫つてあつたのを、二百年程前に備前の人携へ去ると、其時代の本に記してある(リ)。同じ國姫路の城の姥石は、現に繪葉書も出来て居る位の一名物であるが、是が亦中凹(くぼ)の、ちよつと石の枕と謂つてもよい石である。今でも城の石垣の間に置いてある。加藤清正此石垣を築く時、積んでもく一夜の中に崩れ、當惑の折柄、名も知らぬ老婆現れ來り、臼のやうな小さい石を一つ、石垣の上に置いたら、其から無事に積上げることを出來たと、現今では説明せられて居る(ヌ)。此城の守護神は老女では決して無いが、最も威靈ある女性の神であつたことは、此話と共に注意して見ねばならぬ。石を御神體とする姫神姥神は數多いが、其形容を比べて見ることは容易な話で無い。甲州の逸見(へみ)には「おみさき様」の御神體の、中凹の石なる例が正しくある(ル)。同じ北巨摩郡の若神子(わかみこ)では、大石神社の東の田圃の中に、巨大なる石あつて之を姥神に祭つて居た。其形狀をそつと申すならば、著しく女の或部分に似て居り、土地の人は隠し疾を此に願掛し、驗有れば小さな腰巻を奉納するの習であつたさうだ(ヲ)。勿論少し位此様な例が有つたとしても、あゝ成程など、輕々しく膝を打つてはならぬ。が何

事にしても昔の人の感情は粗大であつた。祈念欲求の切なるあまり、時には此類の石からも奇瑞を感じ、乃ち其形に由つて姥の神靈之に宿るが如く、信じた場合もあつたことだけは考へられる。而して我淺草の石の枕の姥石が此範圍の中か外かは、よく見なければ何とも言はれず、又決定してしまふ必要は少しも無い。

姥石と二つ石

淺草の姥石の石の枕は、兎に角に妙音院の淵の近くから、持つて來たことだけは確かであらう。さうだとすれば是迄人の心付かなかつた二つの特性が、やはり此姥石にも共通に存して居たのである。其二つと言ふのは外でも無い。一つには其石が水の中又は近くに在つたこと、次には其數が二つであつた點である。後の方は上總の鬪の姥神石もさうであつたが、尙一段と言傳への明瞭なものもある。例へば武州金澤の稱名寺の境内には、美女石と姥石との二つが、一つは蓮池の中央に、他は池の岸に臨んで在つた(フ)。幸にして長々しい縁起談は聞かぬが、瀬戸橋の北の袂の「いぶし島」と云ふ少しの地に、照手松(てるてのまつ)又は「姥が焼きさしの松」と稱する名木があつて、小栗判官の愛人照手姫を、或老女が松で燻(いぶ)した故跡と傳へて居るのは、多分相關聯する昔話であらう。此と似て居るのは上州神流川(かんながは)の姥石と女房石、共に多野郡三波川(さんばがは)村の池に在つて、東と西に相去ること一里半、其中間には兒石(ちごいし)其他の名石もあるが、此二つは相對して殊に秀で、居る上に、姥石の方は昔は此川の瀬に在つたのを、鬼が盗んで行かうとして途中重さに堪へず、棄てゝ往つ

た爲にこんなに隔たつたと云ふ傳説もある(カ)。川の瀬は通例邑里の境であるから、二つある立岩を天然の境神と拜むことは、峠に二子山の間の路を撰び、原野に二子塚を築いて無形の外敵を防いだのと、多分同じ信仰の發現でもあらうが(ヨ)、之を夫婦兄妹の男女神とは考へずに、老若二人の婦人に托したのは、私に取つては意味深く思はれる。其仔細は後まはしとして、更に二三の例を附加へると、東北では磐城の館山村に、大姥石小姥石の二大石が有る(タ)。阿武隈川の中流に並び立ち、共に水底からの高さ三丈餘と謂つたが、近年幾度かの出水で、どう位置が變つたかを知らぬ。陸前では氣仙郡濱田の姥石河原にも、二箇の老婆石が有つた(レ)。陸中でも一關近くの山ノ目村に、高名なる一つの姥石がある。是亦近世には磐井川の川中に在つたが、其前には一時東の岸に聳え、修驗者が此岩の上に來て雨乞の祈禱をしたこともあつた。さうして之に對立する西岸の爺石(ぢいし)は、もとは流の中央に在つたものだと云ふ(ソ)。此類の巨巖が殊に二つ迄通路の衝に立つ場合には、人が氣を附け且つ敬意を拂ふのは自然の事だが、之を姥石と呼び始めた最初の動機は、必ずしも妹背山式の對稱からで無いことは、前の大姥小姥等の例からも察せられる。安藝の水内川の伯母石(をはいし)なども、獨身生活で川の中流に屹立し、船頭筏師の最も用心をする難所であつた。水の邊に在るから姥石だとするに、何か特別の理由があつて、爺石は此が相手に後から出來た名ではあるまいか。

姥 石 の 悅

美濃の養老郡大墳(おほつか)村、莊福寺の境内に在る姥石は、昔は石の肌が常に人の如く暖かであ

つた。歌人兼禪僧の徹書記、此國在住の間之を聞いて、

おはぢ(爺)には逢ふこと難き姥石のさこそ肌のつめたかるらめ

と云ふ一首を詠んだ處、其恠永く止んだと謂ふ(ツ)。こんな歌ぐらゐで止むやうな不思議では、最初から大した事でも無かつたのかも知らぬが、どの地方の姥石でも、概して勢力の衰へたものか、さ程こはく無い不思議ばかり多い。例へば東部讃岐の石田村に於ては、姥ヶ石は在つても由來がよく分らず、寧ろ之に關聯して細川民部大輔國弘の強勇譚だけを殘して居る。文祿元年の十二月、國弘山に遊びしに老嫗あり路を横ざる。乃ち大石を取つて投付けると、嫗(うば)は飛去り石のみ姥ヶ石と稱して今も轉がつてある。又尾崎と云ふ處に行くと、小僧が二人顯れて國弘を苦しめんとした。此もあべこべに其咽首を摔ぎ池に投込んだ、其池を足迹池と謂ふとある(ネ)。折角の話をけなすでも無いが、凡そ此くらゐ無理な名の附け方も無からう。婆さんが前を切つたと謂つて、岩を投付けるのも牛刀なれば、姥に投付けたから姥ヶ石と呼ぶ筈も無い。察する所兼て細川氏の強力を知りながら、之を試さうとした變化のもので、飛去つたと謂ふからは山姥であつたらうが、殘念ながら今では作り事をするより外に、筋の立つた話を聞かれさうにも無い。さうして今の内に注意して置かぬかと、當世風に尤もらしい話が、果して色々と出て來ぬとも限らぬ。壹岐は誠に窮屈なる島國であるが、海に臨んだ立石村の潟長江(かたながえ)には、百間田(けんだ)と稱して長さ二町以上の大きな田がある。此田のまん中に横はる姥石は、長さが九尺六寸横四尺餘で、別に三尺ばかりの石が其上に重なつて居る。昔高麗國からスマンカクセイと云ふ名の女性が来て、この百間田の石の下に隠れた。仍て之を姥石と稱すと云ふ(ナ)。

素より人の匿れ得るやうな石でも無いが、昔はどうであつたかと、名勝圖誌の著者は疑つて居る。併し以前の日本人には必ずしも此は疑で無かつた。或石には魂が有ること、及び人に宿る魂は又他の物體にも移り得ることを認むれば、全く我々の引越し見たやうなものである。而も高麗から渡つて來た女性と云ふのは、多分は巫女であらうから、そんな事は御手の物である。怨み憤つて死んだ者の靈が石と成る話、或は又石を神體として或人の靈を祀つたと云ふ話を、有り得べからざるやうに考へ始めた者が、頻に人間の化石談に耳を傾けんとしたのは、五十歩百歩の譬の通りであつた。自分は先年肥前の田島神社に詣つて、松浦佐用媛の望夫石を拜して來た。久しく想像して居た立ち姿とは似も付かぬ、他の地に在つたら龜石とでも呼ぶべき中高の石であるのを、尙泣き伏したまふ御形のまゝなど、神官たちは肉身の化石のやうに説いて居た。さう迄骨を折らずともと思ふやうであつたが、是亦聽手の時代が承知をせぬのだから仕様が有るまい。多數の姥石の歴史は、かうして益々荒唐無稽になつて行くやうである。惜い話である。

姥 捨 山

會津の磨上新田(すりあげしんでん)の嫗石(うばいし)は、或時代に毎晩女に化けてあるいたから、嫗石と謂ふのだと傳へて居る(ラ)。姥の魂が石に成つたと言へば、出るのも入るのも自由だから、此も同じ系統の話と見られるが、強ひて化石の説明を信じやうとすると、此石などは只の妖怪談に歸してしまふ。岐阜の瑞龍寺の山の姥石は、姥の坐した形で、其前に芋桶石(をごけいし)と云ふ石も在ると謂ひ

(ム)、駿河の瀬戸新屋(せとあらや)の曰祖母石(うすばいし)は、人の口を開いた形をした大岩で、誤つて足を掛けた者は瘡をふるふと信せられた(サ)。甲州では北巨摩郡祖母石(うばいし)村の祖母石、形は老女が願を支へて坐つた處に似て居るが、高さが一丈以上で周が十二間もある。何れもどの位よく似た形でも、斯う大きくては人が化して此石に成つたと云ふことは出來ぬ。さうすると全く別の話になるのである。山の峯や岬の端に在る姥石で、遠く之を望んで松浦小夜姫同様の物語を説いて居るものでも、仔細に其寸法を測量した結果、之を聽く人をして徒らにやりと笑はしめて止むに至るのは、要するに化石とする方が幾分か尤もらしからうかと思つた結果である。姥の靈は屢々池や淵の水にも宿つて居るのである。さう究屈に考へてしまふべきものでは無かつたのである。

名所の昔話はあまりに旅人が之を珍重し、土地の人たちも成るべく歌になるやうに話す故に、とくと考へると却つて合點の行かぬものになりがちだ。而も其弊は近頃に始まつたのでは無い。信州の姨捨山の如きは、既に古今集の中に「我心なぐさめかねつ」と云ふ一首があり、之に基いて大和物語其他の古書に、女房にそゝのかされて伯母を棄てたと云ふ話が、さも有つた事の如く喋々せられて居るが、土地では必ずしも其通りには傳へて居なかつたらしい。汽車で通つた人は知らぬ者もあるまいが、あの停車場よりもまだ下の方に、高さの六七間ある稍角張つた一つ石が、姨石と稱して立つて居る。姨捨の峯から言へば、ほんの麓の口で、所謂田毎の月の田の畔である。茲で置去りを食はしたのでは殆ど話にならぬが、やはり實地を見ない京の人間には、捨てられた老女が此石に成つたと謂ひ、或は又小山を隔てゝ今一つ、棄てさせた嫁の母も石に成つて居るなど、傳へ(キ)、一説には伯母の怨念

此石に化したとも謂つたのが、隨分と夙くからのことであつた。併し姥捨の地名を説明した元の話には、石の事は一向無いのだから、二種の傳へを一括することは容易で無い上に、其姥捨と謂ふのが右申す如く、老女の形にも何にも似て居らぬのだから、さうで無くても書物を信じやすい世間の人は、あの岩の上に置いて往つたのだらう位に、手輕に斷定して去つてしまひ、結局遺跡と縁の深い方の姥石傳説は、最早あらまし消滅しやうとして居る。是も亦松浦の望夫石と同じく、化石の話が煩を爲して居るので、損害は獨り此一箇の名所だけのものでは無い。そこで自分が少し考へて見やうとするのは、一寸した引掛りであるが第一には此山の附近に、今二つ女の石になつたと云ふ例のあること、二つには姥捨と云ふ奇抜な地名が、更に一箇處大和の金峰山にもあつて、入らぬ老人を處分したと云ふ話以外に、何か新しい語學上の解説が、後日加へられ得るやうに思はれることである。

石になつたといふ女性

女が石に成つた話は存外に多く有る。美作苦田郡香々美中村の繩目石、此は曾て妬深い婦人化して成ると傳へ、之に觸るゝ者には祟が有つた(ノ)。次には尾張知多郡内海村の姥撻石(うばはりいし)、澁谷金王(しぶやのこんのう)の足跡石と云ふのと、二つ並んで居る。源義朝が長田の爲に歎し討に殺された時、従者の金王は何も知らずに漁に往つて居た。主人の大事を聞いて此處まで馳せ還り、老女に逢つて様子を尋ねると、もう夙(とく)に殺されてしまつたと言ふので、悔恨の餘りに其婆を撻つた所が、忽ちにして化して石と成るとある(オ)。迷惑至極な話であつた。どうして其様な原因結果が有るもの

のか、まだ何とも説明に能はぬ。併し此等一二の異例を外にして見れば、他の話には極めて著しい幾つかの共通點が有る。其一つは、此等の石が更科の姥石と同様に、多くは或山の登り口に在ることである。津輕の靈山岩木山の姥石の如きは、説經祭文で有名な安壽御前の乳母、姫を慕うて登らうとして、此處に於て石に成つたと謂ふ(ク)安壽對王(つしわう)二人の孤兒の物語も、やはり淨瑠璃などで泣く分は土地の話と大ちがひで、姉は山椒大夫と云ふ強慾な長者に、丹後の由良の湊で殺され、弟ばかり後に世をして敵を打つたと傳へて居るが、津輕富士の神話に在つては、兄弟ともに還つて来て、大坊の鎮守熊野權現の獅子踊を見物し、弟が疲れて假寢(うたゝね)をして居る間に、姉の姫窃かに先づ登つて、此山の神と成つたと謂ふのである(ヤ)。此を一つの事件の裏表を見ることは、殆ど不可能かと思はれるにも拘らず、強ひて融合させて今では岩木山の女神が、曾て世に在つて由良で苦められたものと解釋し、丹後の船が十三の港に來て繋ると、天氣が荒れるなごゝ云ふ俗信まで出來た(マ)。凡そこんな風に話は變化して行くものなのである。私の見る所では、山椒大夫は室町期の小説に、幾らも型の有る人買ひの話、及び親子兄弟の生別れを材とした、一向平凡なる脚色であつて、文句や節には永く残るだけの面白味が有つたのか知らぬが、他には是と云ふ歴史上の背景も無く、強ひて奥州との關係を言へば、父を五十四郡の元の領主、岩木判官正氏と稱する點であるが、其が又出鱈目である(ケ)。但しそんなら何もかも、皆昔の大丈夫たちの作り事かと思へば、奇妙な事には淨瑠璃の方でも、やはり安壽姫等の乳母と云ふ女性が、格別用も無いのに出で而して死んで居る。寛永板の翻刻かと云ふ正本には、「御めのとのうば竹」御供をしてと唄つて居り(フ)、他の書物には其名を宇加竹とも傳へ(ヨ)、此女

ばかりに特に注意をして居るのは、何か仔細があるらしい。又岩木一族の人買ひ船に賣られたのは、越後の直江津でと云ふことにしてあるが、其附近の居多(けた)村の鎮守を、古くは嫗嶽明神と稱へて、この乳母の「うばたけ」を祀つたと謂ふ説がある(エ)。察するに此語り物が自由に趣向を立てた當時、既に日本海の船乗り等の間には知れ渡つた岩木山の舊話が有つて、乳母が石に成つたと云ふ奇抜な一條が其中に有つたので、丸々之を無視した淨瑠璃も、作ることが出來なかつたものであらう(テ)。越後の嫗嶽明神は、勿論津輕からの勧請ではあるまいが、恐くは信仰に一部が似て居た爲に、終に人買ひの悲劇までが、此近海を舞臺とするに至つたので、要するに山の神に姥石を結び付けた二箇の例が出来つたものだらう。嫗嶽の最も有名なのは、豊後と日向の境に在る山だが、其事は後に折を見て言ふことにする。其とも亦大に懸け離れて、東京の近くに在る一例を爰には言つて置く。飯能(はんのう)の町から近い上直竹村の淺間(せんげん)社は、關東によく見る模造の富士山であるが、參詣路の中腹に嫗ヶ嶽と稱する地點が有り、其から上は婦人を登らせない。昔或老女が禁を破つて、強ひて上らうとして石に成つたと云ふ話がある。嫗ヶ嶽の名は此から起ると傳へて居る。一つしか無かつたならば、此もやはり不可解なる恠談と見るの他は無かつたのである。

姥石と女人結界

陸前氣仙(けせん)の五葉山は、あの地方での名山であるが、亦一箇の姥石があつた。あの老婆が女人禁制を破つて、無理に登らうとして此石に壓されて死んだ。それで姥石と謂ふ話になつて居る(ア)。

恐くは石の形が大きくて人に似ない爲に、石に化したと傳へても信せられなかつたのだらう。磐城相馬の姥澤山の中腹にも、一つの姥石があるが是は由緒をまだ聞かぬ。次に越中立山に在る姥石、此は誰でも老女の化石として評判するが、果してそれ程精密に似て居るかどうか。殊に由來記の區々であることは驚くばかりで、或は「あぶらか」左衛門なる者の乳母、登山して石に成ると謂ひ、或は此山の開祖佐伯有瀬の繼母藤波と謂ひ、又或は若狭小濱の老尼、其名を止宇呂尼(こうろのあま)と謂ふ者などとも傳へて居る(サ)。其は誰であつたにしても、結界を破つて山の清さを穢さうとしたのは同じで、其制裁に額(ひたひ)に二本の角が生えたとも謂ひ、現に社の寶物の中に其角が有つたとある。あんまりだとは思ふが、信じ難いのは何も是一つでも無いから黙つて居る。而もこの越中立山の一例に由つて、頗る啓發せられる點は、乳母でも老女でも又は比丘尼でも、等しく化して石と成り、其石の名が姥石である。即ちさう若くも無い女性なれば皆ウバで、かの姥捨山の究屈な物語のやうに、假名ちがひで行き詰まるやうに狭い姥石では無い。さう考へて進んで行くと、一體どんな種類の婦人が、山に半分登りかけて石に成るかの問題は、やがて又何故に池や泉に姥の名を呼ぶ者が多いかの、答をも導いて来るやうである。例へば姥捨の姥石から山一つ隔てゝ、よく無い甥の嫁の母親も一つの石に成つて在ると謂ふのと、同じかどうかは明白でないが、眞の姥捨山は此山と稱する冠着山(かぶりきやま)の麓、羽尾(はねを)と云ふ村には比丘尼石なる岩があつて、昔は此から奥へは女人を許さなかつたのが、今では轉じて嫁入の此側を通るのを戒めて居る(キ)。高さも幅も四尺ほどの野石で、周圍を石垣で囲うてある。比丘尼が石に成つといふ話は聞かぬが、而も此山と、深い信仰上の關係の有つたらし

い戸隠山(とかくしやま)の方では、鳥居川の邊の中院と云ふ地に、亦一箇の比丘尼石があつて、其傍に女人堂あり、爰を女人參拜の限として居たのみならず、曾て結界を破つた尼が、此石に成つたと傳へて居る(ユ)。

羽後の靈山八澤木(やさはき)の保呂羽山(ほろはさん)では、權限の社家大友氏の舊記に、守子石(もりこいし)の由來として同じ話を遺して居る。此も同じく山中に在る石で、曾て禁を犯し強ひて登つた守子、神罰に因つて忽ち此石に成つたと謂ふ(メ)。モリコは東北地方に活動する一種の宗教職業で、處に由つてイタコとも謂ひ、男で言へば山伏の如く、神佛二道の中間を行く祈禱者である。日光の中禪寺も、以前は立派な女人結界であつた。馬返しよりは尙奥の方、大尻或は不動坂と云ふ邊に、やはり神子(みこ)の化して成ると云ふ神子石(みこいし)があり、古い書物には之を亦守子石とも記して居る(ミ)。日光でも昔はモリコと呼んで居たものらしい。其神子も押強く男體山に登らうとしたのを、女人は禁制だと制せられたにも拘らず、我は神に仕へる者だから只の女で無い。もし又土を踐(ふ)み穢すが悪いとなれば、牛に乗つて登ればよからうなごゝ理屈をこね、すんぐ行くうちに牛が先づ牛石に成り、其を叱つて居ると思ふと、やがて又一つの神子石が出来たと謂ふ。佐渡の金北山大權現は、本地勝軍地藏で別當が眞言宗の眞光寺、此島第一の高山にして又女人禁制である。或巫女自分は神職だから宜しいと、強ひて登山をする間風雨雷電あり、忽ち其女の行方を失つた。其以後山路に見馴れぬ大岩が一つ出来た。頭は婦人の髪を結つた形なので、今に之を巫女岩(みこいは)と呼んで居る(シ)。海を越えて羽前の莊内にも、よく似た話が猶二つある。其一つは月山の中腹、小月山から登つて行く

路に在るミコ石、或は皇子石と書いて此山開山の蜂子皇子、此岩の上に魔障を加持したまふなどとも謂ふが、又一説ではやはり巫女の結界を破らんとした者、爰に到つて脚痺れ進む能はず、乃ち此石と爲ると謂ふ(エ)。第二には莊内六名山の一なる金峰山、今から二十年餘り前迄は、女は石に成ると信じて一步も登る者が無く、現に社務所のすぐ上の路傍に、昔の巫女が罰せられて爲つたと云ふ大岩があつた(ヒ)。此金峰山も大和の本山と同じく、藏王權現(ざわうごんげん)を祭つた山であつた。武藏の内にも更に尙一つ、秩父の兩神山の山路富士見坂に此話が有る(モ)。碑文も何も無い自然石の立つて居るのを、或は一位墓(いちゐのはか)とも稱へて居るが、其イチキが巫女の別名たるイチの誤であることは、同じく結界を破つた巫女が成つたと、謂ふのを見ても察せられる。

姥登山の同行者

中禪寺舊道の神子石(みこいし)牛石と殊に似て居るのは、是も羽後的一名山、赤神山のイタコ杉大子石である。曾て一人のイタコ、犬を牽き連れ、押して女の登られぬ嶺に登らうとして、やはり忽ちにして其杉其石に爲つたと謂ふ(セ)。他の山々では何れも石であるのに、此だけが樹木である點は亦一變化である。併し是とても決して類例を有せぬのでは無い。現に越中立山の姥石の話にも、之に伴つて女が樹に化したと云ふ美女杉(びぢよすぎ)禿杉(かむろすぎ)の話がある。止宇呂の尼、立山に登るに、壯女と童女各一名を連れて來た。姥が石に爲るに先つて、壯女忽ち杉の木に化す。之を美女杉と云ふと古い本には書いてある。童女の方はどうしたか不明であつたが、近頃は何の都合でか同行者を一

名に減じ、或は八百比丘尼の従妹（いとこ）加牟呂とか、或は佐伯の繼母の腰元禿（かむろ）とか謂つて、
加牟呂杉の由來をのみ語つて居る（ス）。禿は女童のことゝ思はれるから、或はもと二本あつた杉が一本
枯れ、此の如き合體を見たのかも知れぬ。何れにしても石に化したのでは、形や寸法を問はれる心配
があるが、樹木なれば自由なもので、さうして又昔の思想にも近いのである。處が又加賀の白山（は
くさん）の方を尋ねて見ると、立山と殆ど瓜二つと言つてもよい程の話が有つて、而も同行の美女は
杉には爲らずに、美女石と云ふ石に化して居る。繰返しに近いがざつと荒増を述べると、昔白山の麓の
瀬戸村に、融（とほる）の婆（うば）入道して融の尼と云ふ女住み、法術祈禱を業とし兼てよき酒を造つ
て富を得た。或時白山に登つて酒を諸國の參詣者に賣らうと思ひ、美女を連れて中腹まで登ると、山
神激怒して風雨鳴動し、見る／＼若い女は石に爲つたのを、猶怖れずに進むうちに、終には自分も石
に爲つてしまつた。今の姥坂の姥石即ち是である云々（い）。此地と美女岩坂との中間に、甕破（かめわ
り）坂と云ふ地があつて、老女持參の酒甕がそこで碎け散つたと傳へて居る。一から十まで丸で同じ
なら、或は一方が眞似たと言つてもしまはれやうが、要點がよく似て端々に差異があり、而も各其山
の現實と符合して居るのはどうしてか。殆ど凡慮の解釋し得る所では無い。其上に更に驚くのは、今
一點の奇抜なる共通である。日光でも神子（みこ）が罵つたと謂ふが、立山では童女の怖れて進まぬの
を、尼が小便をしながら大に叱つた。其小便の跡と云ふのが偉大な穴となつて殘つて居り、名けて叱
尿（しかりばり）と謂つて居る。白山の登り路でも、伏拜（ふしをがみ）よりすつと上手に、大小二つの
呵責溺があつた。他の地圖には柴刈塹とも書いて居るから、やはりシカリバリで、其跡が塹（ほり）の

やうであつたと知れる。此方では雲霧の中から山の神が大に叱り、之を嘲(あざけ)つて融の姥(ばり)をしたことになつて居る。此様な姥(はかな)い又人の聞きたがらぬ點まで、如何にして類似を見るに爲つたのか。三河の鳳來寺山では立白二山の如き若い同行者の話は無いのに、やはり岩の上で罵つて尿をした遺跡と云ふのが有るさうである(る)。此山の巫女石の由來は、少しばかり他と異なつて居る。大昔開山の利修仙人、巖窟の奥に在つて修行して居ると、淨行尼と云ふ尼が尋ねて來た。七日の間此岩の上に立つて待つたが、女人を忌んで利修は終に對面せず、尼は大に怒つて岩を碎いて尼谷へ投込んだ。其地を今も尼の行道と呼んで居ると謂ふ(ば)。

名僧と老女

如何に神秘の山の法則でも、人を石にするのは些しく酷に失するの感がある。殊に姥石の多數は恰も女人禁制の結界に立ち、此地點迄は後世でも只の婆をすら許して居るのに、言はゞ信心の巫女比丘尼を、化石させるとは聞えぬやうであつた。又姥の方としても、其様に抵抗して迄登りたがる動機も分らなかつた。そこで猶色々と尤もらしく説明しやうとした人がある。岩を谷底へ突き落したと言ふなども、低い處に在る姥石に理屈を附けた一方法では無かつたか。越前の越知山(をちさん)は泰澄大師の修行を始めた山である。此山では同種の大岩に夜泣石の名を與へ、今も眞夜中には聲を立てゝ啼くと謂つて居る。或尼が我も佛の御守(おもり)をする者だからと、無理に結界を超えて入込まうとして、忽ちに谷の大岩の下に投げ落されて死んだ處と謂ふ(に)。泰澄在住の時のことださうである。此尼

と大師との關係は勿論分らぬが、別に白山三箇年の山籠りの間に、大師の御母が逢ひに登らうとして、中途で妨げられた話が残つて居て、此點も亦越中立山の開山の母の話と近いのは珍しい。越前平泉寺の縁起に依れば、此方面から路を四里ばかり登つて、七難の岩と云ふ處がある。大師の母、今まで歩んで來ると、急に風雨夥しくして岩が二つに割れ、呆れ（たゞ）んで居ると泰澄神通を以て之を知り、飛ぶが如くに其場に馳せ付け、是より上は佛菩薩影向したまふ所、女の御身では叶ひ申さず、其代りには妙理權現授けたまふ所の女人禪定の印文、同じく即身成佛の曼陀羅、之を進せますから御還りあれと言ふにより、老母は之に従つて二物を受けて山を降る。後果して百年の齡の末に、往生極樂の素懷を遂げたと謂ふ（ほ）。此話は言はド平泉寺の銅版曼陀羅の廣告見たやうなもので、其爲に末は目出たしで結構に納まつて居るが、やはり一箇の姥石傳説であつたことは、女人の登山を戒める爲に、風雨大に荒れて岩が二つに裂けたとあるを見てもわかる。

江州伊吹山の寺ヶ嶽にも、同種の話が有つて石の名を手掛岩と名けて居る（へ）。此山は役行者（えんのぎやうじや）、其から行基菩薩が相次いで修行に入つた仙境で、麓には三の宮女一權現の社なども祀つて居るに拘らず、山六分目の大平と云ふ處から上は、里の女は相戒めて決して登らず、其から更に進んで七分目の處に、右の手掛岩は在るのである。是も一人の比丘尼が、曾て無理に登山しやうとする、此邊に於て雷電震動し其尼は死んだ。苦惱の餘りに此岩に手を掛けたと謂つて、五本の指の痕歴然と残つて居る。此比丘尼も亦何が爲に、天氣も考へずには非登らうとしたか不明だが、高野の山では恰もよく似た石の話に、やはり弘法大師と母夫人との關係を語ること、白山の泰澄大師と一樣であ

つた。高野の登山路では五十四番の町卒都婆(ちやうそとば)の傍に、捻石(ねぢいし)と稱して捻ぢつたやうな形の石が立つて居る。八十の老母我子の住む山を見たさに、今まで來たけれども山の淀で許されぬ。悲歌の涙は永く涙川と爲つて流れ、後の世の人の母に、今の恨の跡を見せたいと、手づから此石を捻つたと傳へて居る。但し空海も越の大徳と同じやうに、此地へ遣つて來て母親に對面はしたのである。捻石から僅か上手の不動坂に、大師の足の跡及び手の跡が、やはり岩の上に残つて居る。老女は一念は制し難く、押して登りたまふとなれば之を踏んで歩みたまへと、大師が石の上に脱いで投げた神聖なる袈裟に、猶足を掛けて進まうとすると、忽ち火燃えて袈裟を焼き盡し、其石は碎け散り、又大龍は火の雨を降らせた。其時大師が親子の情で、大きな岩を押揚げて其下に母を隠し、火の難を救はれたのが押揚石で、今に亦高僧の手の跡が、其面にちやんと附いて居るのである(と)。此類の話は境の石の手の形と云ふことが、最初の種を作つて居ることは確かである。手形は單に證文の上に、我々の印の代りに捺して居たのみならず、誓納の偽りで無い驗として、殊に法力の優れた人の所作として、不朽の岩石の上にも之を遺してと云ふ口碑が多い。同じ弘法大師が惡魔を對じたと云ふ甲州の押手澤、或は陸中岩手の三つ石に、鬼が再び來ぬ證據として、岩に手印を押したと云ふ話など、例は挙げきれぬ程有るのだから、女人を許さぬ山寺の結界の石に、之を説くことは不思議で無い。只我々の考へて見たいのは、どうして其が一轉すれば老女が石に成つたと云ふ縁起になるか、其よりも猶分らぬのは、各地の姥ヶ池に老若二人の死靈を説く如く、靈山の姥石にも時あつて親子の對面の物語が、附さも無く結び合されてあることである。

都藍尼と役行者

越中立山の止宇呂の尼、加賀白山の融の姥の變つた名前は、更に又大和の金峰山の昔の仙女、都藍尼(とらんのあま)と共通の起原を持つものらしい(ち)。都藍の傳は元亨釋書にも有るが、更に古くは本朝神仙傳の中にも出て居る。久しく吉野山の麓に住し、若狭の八百比丘尼の如く長命を得た所の尼であつた。修行功を積んで後、何ぞぞして女禁制の金の御嶽に登らうと思ひ、中腹までは進んだがやはり雷電霹靂して、終に其目的を達しなかつた。日光の守子が牛に乗り、赤神山のイタコが犬を連れて往つた所を、都藍は仙人だけに龍を呪して之に乗るとあるが、やはり進むこと能はずして大に罵ると謂ひ、嗔つて踏む所岩は、悉く崩れ裂けたと謂ふ。更に多くの話と似た點には、我は女の身ながらも戒行を具へたものだ、凡婦と同じに視られては承知せぬと、自信は最も厚かつたけれども、尙且つ金北山の巫女などのやうに、中途から行方が不明になつた。都藍尼の突いて登つた杖は、棄てた處に自然と根を差して、終に大木となると傳へられる。今では山中の樹立に紛れてしまつてどの木だか分らぬが、其故跡と稱して山上の行場路(ぎやうばみち)に足研山(あしづりやま)と云ふ處がある。尼が憤慨して蹉跎(あしずり)した現場と稱す。而も何れの時代に造つて置いたものか、別に猶二尺餘りの老女の石の像が、此地の道の脇にも、又奥の院の安禪寺の本堂にも有つて、面白い事には俗に之を役行者(えんのぎやうじや)の母君だと傳へて居る(り)。行者の母は歴史にも出て居る人だが、勿論龍に乘るやうな仙女では無かつた。唯誤にした所が何か事情が有らうと思ふのは、第一には高野の弘法と白山

の泰澄と、又立山の佐伯有瀬とに、共に母親の尋ねて來た話のこと。第二には役小角が金峰を開き、高山の宗教にかけては最初最高の一大人格であること。第三には東日本の山々で同じく女人の登山を説き石を説く處には、往々にして吉野の峯から、藏王權現を勧請したものゝあることである。更に一步を進めて考へて見ると、日本に一つかと思つた姨捨と云ふ山の名が、この大和の靈山の名所の中にも有ると謂ふのは、或は猶老いたる女性と其子との不可思議な舊關係が、假に棄老傳說の唐模様の衣裳を着て、信濃の更科にも出現した原因であつて、地名の眞の由來に至つては、此から更に尋ねて見ねばならぬものかも知れぬ(わ)。

註

(イ) 増訂武江年表一四一頁。

(ロ) 帝國書院本の鹽尻卷五十二にも此話はあるが、只打殺すとばかりで、どうしてとは書いてない。釣天井式の方法などは、更に後の作り事であらう。

(ハ) 新編會津風土記、上荒井村の條。

(ニ) 夫木和歌抄卷三十二。「ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬへら也」。戀歌には珍しい石の枕である。

(ホ) 日光驛程見聞雜記。

(ハ) 上總町村誌。

(ト) 此點に付ては「郷土研究」三卷三二八頁以下、旗鉢考に引いた例を見て戴きたい。

(チ) 新編武藏風土記稿、都筑郡上星川村の條。

(リ) 舊本の赤穂郡誌。

(ヌ) 故郷見聞錄、長谷川安治君報告。

(ル)

進藏百太郎氏手紙。

(ヲ) 甲斐國志卷二十九。

新編鎌倉志卷七、鎌倉櫻勝考卷十一、及び新編武藏風土記稿久良岐郡金澤村泥龜の條。

(カ) 上野志中卷、及び上毛國風土記に依る。

(ヨ) 此點は別に「たけくらべの話」として書くつもりである。此序に述べてしまふことは少し六かしい。

(タ) 仙臺封内風土記、同村の條。今は伊具郡館矢間村の大洋である。

(レ) 同書。今のは何村が知らぬ。

(ソ) 同上。及び關邑略志。

(ツ) 新撰美濃志。此村今は多藝村の大字。

(ネ) 讀岐三代物語上卷。石田は今の大川郡石田村。此話はダイグラ法師系の話と混線して居るやうだ。

(ナ) 壱岐名勝國誌卷二十。立石村は今では鯨伏村の内である。

(ラ) 新篇會津風土記此村の條。今は岩代耶麻郡磐梯村の一の字である。

(ム) 新撰美濃志に、鹽尻に依るとして出して居る。

(ウ) 駿國雜志卷二十八。今のは太郡青島村の大字である。

(キ) 類聚名物考卷三百二十に引いた古今抄。藤原爲家の作と謂ふ。次の説は昆陽漫錄に、楊鴻隨軍を引用して爲氏の説だと謂つて居る。元は同じかも知れぬ。越遊行囊抄卷六下には、「娘が石に爲りたる由土地の人は謂ふ」とある。

(ノ) 作陽志。此村の條。

(オ) 張州府志卷三十。近年編纂の知多郡誌上卷にも見えて居る。

(ケ) 「津輕のしるべ」等。

(ヤ) 「日本及日本人」の郷土光華號、藤田信氏報。

比丘尼石の話（柳田）

(マ)

橋南谿の東遊記卷三其他。

(ケ)

舞の本の「志太」なごが一番此とよく似て居るやうだ。

(フ)

徳川文藝類聚卷八の八五頁。

(コ)

和漢三才圖會卷六十五。

(エ)

明治神社誌料上卷、此社の條に引用した越後名寄及び越後土產。乳母の一念大蛇となつて海に入り主の跡を慕び、後に海上鎮護の神に祭られたと謂ふのである。

(テ)

「郷土研究」三卷六五頁以下に山莊大夫考の一篇を書いて置いた。故に大部分は爰には省いて置く。

(ア)

仙臺封内風土記、氣仙郡上有住村の條。

(サ)

一は山中笑翁の士俗談詣、二は山林公報の大正三年六月號、三は越中舊事記其他色々の書物に在る。若狭の八百比丘尼だ
と云ふ説もある。此から分れたものらしい。大日本老樹名木誌なごが其である。

(キ)

「郷土研究」三卷一二一頁、高島冠嶺氏報。

(ユ)

信濃奇勝錄卷二。信濃佐々禮石卷十四。

(メ)

雪之出羽路卷四に依る。

(ミ)

古い方は日本鹿子卷九。次は諸國里人談卷一、木曾路名所圖會卷六其他。

(シ)

佐渡土產卷上。

(エ)

三山小誌に依る。

(ヒ)

酒田の人今井安太郎氏報。

(モ)

新編武藏風土記稿。

(セ)

眞澄遊覽記卷二十九。

(ス)

前二易すた四重の本こ表る。

(い) 白山遊覽圖記卷二及び卷七。漢文だから少し精確で無い。

(ろ) 「郷土研究」四卷四四六頁。早川君報。

(は) 日本風俗志中卷一二五頁。

(に) 「郷土研究」一卷三七三頁。井上建重氏報。

(ほ) 平泉寺は白山參詣の越前路の、久しい間の管理者であつた。越前名勝志には此縁起の全文を擧げて居る。七難と云ふ珍しい名の岩は、能郷の白山の登り口たる、美濃の根尾谷の川の中にも在る。巫女の信仰に因るものと思ふが、あまり複雑になるから爰には述べることが出来ぬ。

(へ) 近江國輿地誌略卷八十一。

(き) 紀伊續風土記、高野山之部卷五十七。

(ち) 此點に就ては、「郷土研究」四卷三三九頁以下の老女化石譚にも論じてある。「おとら狐の話」の中にも、狐の名の「おとら」は亦同じく巫女の名に起るかと云ふことを説いて置いた。

(り) 西國名所圖會卷八。元享釋書の方は卷十八。

(わ) 吉田博士の地名辭書に、チバステはチハツセ(小長谷)の誤で、初瀬の觀音の關係がら出た名だらうさあるのは、少し大膽に失した斷定である。

柳 国 男